

おんこく
時刻
481410

ふさ おすみ 元
袋の鼠 1932°
袋の中の鼠 4883°

山嶺 710°
海視 569°
4,822°

5万分の1地図

出立 106°P 宮地 地8経 1529°

4902° 4918°
食事をたてまつった 4815° 129°

大山 紀下388° 米45斤

大山越え

六月二十五日

六月二十五日の會明に、
荊萩野（阿蘇神社）
がある宮地あたりかに着き、しばらく行軍
を中止して、食事

一かし、朝食もそこそこに行は出立した。
阿蘇谷の東の奥、眼前には、ほぼ垂直に切
り立つ天にも届くばかりの外輪山、内壁
（七〇〇〜八〇〇m）があつて、行く手を止

えぎつてゐた。
へ西方に、敵の追手の軍勢が迫つてきては
いまいか

人々は、西の方角を凝視した。
今、敵の軍卒たちに急襲されたら、阿蘇谷
の奥の大海人皇子らは、袋の鼠も同然、逃

入る所もないのである。
一刻も早く、最初の大きな難関といえ
るこの嶮峻な断崖絶壁を越えなければならな
かった。

山王 687^p
 山王 934^p
 山王 438^p
 山口 2294^p
 山王 545^p

(寺) 4842
7所 從者9名とある

あそだに
阿蘇谷 4818^P 115^h

紀下388¹
注29

2295^P 凡て55^P
127

2295^P 山口

和名 640^P 日田
628 生基
産産4917^P

4,824^P

きつ水、^{12.5}鹿深。今の滋賀県甲賀郡に相当す
る所¹¹筑後国生葉郡。豊後国日田郡¹²
越えて、父大海人皇子の一行とおちあつた。
な¹³常陸国風土記¹⁴行方郡糸や、¹⁵出雲国
風土記¹⁶鳥根郡朝酌の郷糸に¹⁷山口¹⁸と記さ
れており、共に、¹⁹山の登り口²⁰の意味だと
いう。²¹「風土記」日本古典文学大系、岩波
書店、五五頁注一八、一二六頁注七参照。第
三十六章へ追手²²の項におい²³て既述²⁴
また、²⁵柘植²⁶の山口²⁷は、伊賀盆地の東北隅に
位置²⁸してあり、伊賀・伊勢国境の鈴鹿山地を
越²⁹える³⁰。い³¹わゆる³²加太³³越³⁴の登り口にあたつて
いる。³⁵恐らく、
へ阿蘇盆地の東北隅に位置³⁶してある阿蘇谷
東端³⁷の³⁸外輪山³⁹への登り口⁴⁰は、⁴¹伊賀盆
地の東北隅に位置⁴²してある⁴³柘植⁴⁴の山口⁴⁵に
相当する⁴⁶。
と考えらるたのであろう。

紀下388¹
125^h下端

板12行落合

全
× 1/8

せんちろえ
前北 1271P
揺がす 2264P

4,825P

疾馬 989P
疾馬 1624P
疾馬 388P
疾馬 586P
疾馬 123P
疾馬 4814P
疾馬 386P 注 17
疾馬 491P
疾馬 4810P 注 2行

米

早晩に、留宇司（留宇を預かる官司）高坂王が、
鈴の引き渡しを拒んだ時から以降の大海人皇子
子方の動きには、目を見張るものがある。
大分君恵尺は、馬に鞭打ち、馬を乗り継ぎ
ただただ一途に馳って近江（大宰府）へ到り
くや、ただちに配下の九名を引きついで疾駆
生葉郡から山中へ入り、杖立川沿いに南
下して六月二十五日の朝には阿蘇谷の東端
山口で父大海人皇子と落ちあつたように
解さる。登り口
おほきだのきみえさか たけちのみこ
大分君恵尺や高市皇子らの教一い息遣いが
時を越えて、開えてきそうである。
もつとも、近江（大宰府）の方では、
天下を揺がす戦いの前北に、まだ、全く
気付いていないようであつた。

4,826^p

としかく とうにかく
「こうに」④4823^p新
↑としかく④4,820^p6号

一行

大^{おほ}海^{あまの}人^み皇^{こう}子^し等^ら一^{いつ}行^{ぎやう}は、
阿^あ蘇^その^の外^{がい}輪^{りん}山^{さん}の^の内^{ない}壁^{へき}を、^{みぎ}右^{みぎ}に^を折^おれ、^{ひだり}左^{ひだり}に^を折^おな、
水^{みづ}し^て登^{のぼ}った^や、
達^{たち}を^を背^せ負^おい、^{たが}互^{たが}に^{はげ}励^{はげ}まし^あ合^あり^なか^ら、^{きゆう}急^{きゆう}
峻^{しげ}な^な崖^{がけ}を^を一^{いつ}歩^ぽ一^{いつ}歩^ぽ登^{のぼ}っ^た。
●^{おほ}早^{はや}し^てつ^つい^いに、^{おほ}大^{おほ}山^{やま}（^{がい}外^{りん}輪^{さん}山^{さん}）^{さん}の^{さん}山^{さん}頂^{ちやう}に^{いた}到^{いた}
突^{とつ}破^ぱした^のだ^{った}。
す^すな^なわ^わち、^とと^もか^かく^く無^む事^じに、^{さい}最^{さい}初^{しよ}の^{なん}難^{なん}関^{かん}を

*

H5.10.17(日) 紀上325' 天日輝 紀上260' 主稻大かつ玄舞に生し
 八上2563' 五上325' 王稻4828' 紀下588' 4.827' 紀上292' 紀下388' 紀上280' 紀下388' 田道間守

東国への入口の守り

大山(阿蘇の外輪山)を越え
 行き、東国に至った。

第一表に示す通り

後、國司守三宅連石床(三宅連は新羅

國王子天日輝命の後という)・高田首新家・

三輪君子首、および湯沐令田中臣足麻呂ら

加軍勢を率いて大海人皇子ら行を迎えた。

ところ、三宅連石床は、伊勢國の國司守

であつたうう、と通常考えらる。

とはいえ、三宅連石床加どの國の國司守

あつたのか明記されておらず、高田首

新家が美濃國の主稻と思われることから、こ

の國司、及び湯沐令も美濃のそれであらうと

する説がある。(「日本書紀」(下)日本古典文

学大系、岩波書店、三八八頁注三一参照)

尚、先に述べたように、仲哀紀八年条に、

天日輝の苗裔五十跡手か、穴門の

引島(下関市彦島)に出迎えた

という記事があるから、その関連性を考えてみ

(ゆたう
主箱 紀下588^P
続記④-46

(こと

4.828^P

あまのくはのみこともち
いなぬ ④4375 穴戸国司の草壁座に32
箱主④4340^P 12斤 紀下386^P 4斤 ↓

国司④4809^P 1斤 紀下386^P 1斤
④4806^P 出立 元1067^P

*

に、救援の為、急いで南下してきて、
へこの日、六月二十五日に、大海人皇子ら
を迎えた。と想察される。

あるいは、六月二十二日に吉野を後にした
村国連男依らは、彌奴国（山口県）へ急行し
湯沐令多臣品治に機密を打ちあけ、まずその
郡の兵士を徴発した。とではなかつたらうか。
更に、男依らは、国司等（穴門）
の引嶋を領有する伊都国の国司守三宅連石床
らに、経られたのかも知れない。
そこで、国司守三宅連石床は主箱高田首新
家・三輪君子首・湯沐令田中臣足麻呂らと共

④906^{3/4}系書
 ④907^{1/2}
 ④903^{1/4}系書
 紀上266^{1/2}新羅王の子天日槍東照^{あめのひはこ}と記
 第1表参照！

4,829^P-1/2

記(保)
 153^P
 紀上280^{1/2}系書^{あめのひはこ}
 ④4807^{1/2}
 ④4845^{1/2}

宮への帰還の項において既述。第1表参照)

五十迹手^{いそで}——三宅連^{みやけのむらじ}
 といいう血筋を考えてみたい。(第十一章へ香椎^{かすか}の
 岩波書店、二八〇頁、注五参照)
 新撰^{しんせん}姓氏録^{しんせいりく}、右京諸蕃^{うきやうしよばん}・同撰津諸蕃^{どうせんつしよばん}に、
 三宅連^{みやけのむらじ}、新羅国王子天日槍^{あめのひはこ}命^{のみこと}之後也^{のちなり}
 とあり。同族に橘守・糸井造などがある、と
 いう。(「日本書紀」(上)日本古典文学大系、
 岩波書店、二八〇頁、注五参照)
 そこで、
 新羅国王子天日槍^{あめのひはこ}——田道間守^{たちまもり}——
 といいう血筋を考えてみたい。(第十一章へ香椎^{かすか}の

ちなみに述べると、
 垂仁^{すいじん}紀^きの最末尾^{さいまひ}に、
 田道間守^{たちまもり}は、是三宅連^{みやけのむらじ}の始祖^{はじめのおや}なり
 垂仁^{すいじん}記^きに
 天皇^{てんかう}(垂仁天皇^{すいじんてんかう})、三宅連^{みやけのむらじ}等^らが祖^{おや}、名^なは
 多遲摩理^{たぢまもり}をもちて、常世^{とこよ}の国^{くに}に遣^{つか}はして、
 ときにくのかくの木の実^みを求め^{もと}めたまひき
 云々^{云々}

一行

たいそう 1341
大層 甚だ

未 3242
未 654

4.829^P-3/2

3242^P

その この

つまり、
 三宅連は、天日稚・田道間守・五十迹手
 の直系の子孫であつた
 ように見受けられる。
 また、すでに述べたように、
 五十迹手およびその子孫は、伊都国はか
 りでなく、引嶋（下関市彦島）をも所領とし
 ていたのであう。
 と思われる。（第六十五章へ阿利斯等・阿羅
 斯等✓の項において既述）

この物語では、
 新羅国王子天日稚の末である国司守三宅
 連石床は、
 穴門の引嶋を居所としていたのではあ
 ろう。
 と解いてみたい。

その時の大海人皇子の喜びは大きかった。
 何とな小は、
 天日稚の末裔である国司守三宅連石床
 をはじめとする軍勢が、大海人皇子等一行を

本領 杖立川上流域
129

要所 2270P
関所 1237P

大津皇子 4842P

批下 292P
4,830P

三輪 4902P
田中 4902P
2356P

男依 6月22日
吉野 6月22日
4828P 239P
紀下 388P 32

出迎えに来た

と、いうことは、
山口県へ遣わした村国連男依らの働き

によつて、六月二十三日、二十四日に

へ近江へ大宰府と、倭京との間を、とり

あえず分断し得た

という日、快拳山を示して来たからであ

それは、大海人皇子にとつて、何よりの朗

報であつた。

ここに大海人皇子は、五百人の軍兵(彌奴

国から南下して来た国司中三宅連石床・高田

首新家・三輪君子首・湯沐令田中臣足麻呂ら

の軍兵であらうか)を宛て、外輪山の崖の縁

で見張らせ、東西へあるいは北(大宰府)へと

続く山道の守りを固めさせた。

西方大倭(肥後)や北方近江(大宰府)か

らの追手の着座を防ぐためであつた。

外輪山などの要所(関所)が、武器を持ったも

のものの兵達によつて、昼夜となく厳重に

監視されたことになった。

4879P
1/2

杖立川上流域など

4.831^P

こと

天つき
改行

やまと ④ 4852 紀下396^P
2行

■ なお、七日後の七月二日、大海人皇子の指

示しによつて、ら

・三輪みわのきみ君子首こびとは、この大山おほやま（阿蘇あその外輪山がいりんざん）

より、こゝを越えて（大）倭（肥後）へ向む

かい

・田中臣足麻呂たなかののみたりまろは、倉歴道くらひのみち（阿蘇あそと大宰府だいさいふと

さつなぐ道みちか）で守備しゅひするべ

こととなる。（後述）

*

こと

11月 1007 紀F388年
④4807 4,832 P

今 19年下瑞

4807 4814 4830 紀F388年
④4807 4814 4830 紀F388年
川曲 482 川の折れ曲り、流れの所

東へ駈け下る

右へ左へと曲り曲って流水下る川に沿う

坂道を、大海人皇子を始めとする一団は、

長蛇の列をなして駈け下っていった。

この戦いの成否は、

へ近江（大宰府）と、倭（ヤマト）とを、いかに早

く完全に分断できるか

にかかっていたりすると、7月も過ぎ言ではなかつた

村国連男依らが彌奴国（山口県）へ先発し

幸いに

て現在不破道（長豊海峡）を押えていると

は、いっつも、東西から挾撃されたりは

とたまりもあるまいや

どうあつても、大海人皇子自身が、電撃的

に逸速く不破文字関・馬関あたり陣を張

り、東西の両軍を圧倒せねばならなかつた

川曲の坂下に着くと日が暮れた。

妃菟野皇女がお疲れたので、暫らく

行軍を留めて休息。しかし空がにわか暗く

なり、雨が降りそうになったので、ゆっく

紀下389P 地名 1464P

寒え雷雨 紀下389P 4833P
大にワ、小にエ并生

2303P

572
2303P
424

2239
6/26の朝には朝明
雲7は内に合めら

2303P

馬地す 1786P

リ休憩 すること出来ず、出発した。
やかた敷しい雷雨となり、おともに従う者達
はみな衣服を濡らした。夏とはいえ、衣裳湿
れて、寒さに堪えなかった。
妃菟野皇女は、馬の背に揺られて雨の夜道
を急ぎ下りながら、一い一い遙かな昔のこと
に、想いを馳せておられられた。
「かつて、田心姫様は、この山間の道を輿
に揺られながら、必死の思いでかけ下ってお
ゆきになったのだわ。」
あれは、真冬の夜のことであったから、姫様
達は寒さに凍えきってあられたのに、さらに
己甚しい寒え雷雨に見舞われて、おとも
に従う者はみな衣服を濡らし、寒さに堪えな
らなうな。
だから、丁度このあたり、三重の
郡家（豊後国大野郡に三重）という町があ
るに、着いた時、小屋に火を放って、冷えき
った者達をあたたまらせたのよ。
菟野皇女は、四百年余の昔の出来事と、今
の己の状況とを、重ね合わせてみずにはおれ

新X10-135

（三重町）参照

H9.4.30
H5.10.20(1)
美知子監理(4842) 紀下389
(社長の)

4842P
4842P

宇佐下232P
井上292P

4.834P-1/2

2303P

なかつた。(第三十六章へ寒え雷雨の頃参
照)

・なお、この一夜が明けてすぐ、

り、六月二十六日の旦辰時

ハ大海人皇子の一行は、早くも、宇佐国へ

到着される✓

ように見受けられる。(後述)

とすれば、恐らく、

へ妃菟野皇せは、輿ではなく馬に乗っ

て、疾駆されたのであろう✓

と思われ。

● 強行軍が続いた。

↑↑ 真夜中ごろ

使者を遣わし

山部王と石川王とが、帰服する為

て参りましたので、関に留めております

と報告した。

大海人皇子は、路直益人を使わして、二人

をお召しよせになった。益人は、関の方へと

駆けつけた。

か

杖立川 4825P 67 馬の背にかられて前頁5行

4837P 2行 4736P 18行
4836P 18行

4,834^P-2/2

続きは 648K2^P

F4/19
4/8

大^{おほ}海^{あまの}人^み皇子^こは「大^{おほ}きく^{うな}領^{りやう}さ^す身^みを^の乗^{のり}り^だ出^でて
お尋^{たず}ね^かにな^なった。
そ^その^{ふたり}二^{ふたり}人^にの^{とく}特^{とく}徴^{ちやう}を^も由^も一^{いつ}つ^みみ^よし
こ^こに^{おほ}大^{あまの}海^み人^こ皇^こ子^こは「路^{みち}直^{あた}益^{ます}人^{ひと}を^を使^{つか}わ^して
二^{ふたり}人^にを^をお^お召^め一^{いつ}寄^よ世^よにな^なったや
益^{ます}人^{ひと}は「笑^{せき}の^{ほう}方^{ほう}へ^とと^と馬^{うま}に^がけ^けて^いったや
＊

200

見上げると、山頂へと続く参道が、鬱蒼と茂

りひ元(心)うかがえ1767
王里非 2317 何う神も目上...
道理にかなっていることとはすめ...こと

心が急ぐ 1241

4,836 P

お4846 P20所
あかひ
安斗車阿加布

定かでない。

大海人皇子は、この参道を登ってゆき、頂

上の天照大神に直接お目にかかつて、ことの

理非をお伺いし、かなうものならば、勝たせたまえ

と祈りたかった。かゝる今はその余裕が無かった。不破(はな)文(ふみ)

字関・馬関へと心が急かれた。その大海人皇子らは、川の辺にいて、天

照(太)神を望拝した。天武紀元年(六七二)六月二十六日条に

は、こう記されてゐる。二十一日の日、朝明郡の迹(大)川の辺に

いて、天照(太)神を望拝みたまふ。とある。

もつともこの部分、新日本紀所引私記の引く安

斗智徳日記には、廿六日辰時。於朝明郡迹(大)川上而拜礼天

照大神とある。(日本書紀)(下)日本古典文学大系、

山根教書店、三九〇頁(一参照)

45.10.21(木) 160000/月
理江 中実国送 来た由
OSC 19/6(日)から出勤

4.837P

ほうい 云 云 15P
奉祀 205(成巧)あかつきには
おまつり中など

みこころ 云 2109
御心 2109
④4970

58分の(地図)
きた・宮田

寄藻川
御元

道

あるいは、

六月二十六日の辰時(現在の十時頃)大

海人皇子らは、朝明郡迹(大川上)に相当する所

寄藻川上において、大元山山頂の鎮座して

おりでになる天照大神を望拝された

と解釈すべきなのかも知れない。

ここに、大海人皇子は、

天照大神の御心が、私の熱い思いを哀れ

みたまい、お導きくださって、我が軍に勝利

をもたらしてくださいますならば、その時

には、必ずや御礼に参上し、厚く御奉祀させ

ていただきます

とお誓いになったのであろう。

米

④4838
1/2 4分

うなづ
領く

朝明川
四日市

朝明川

納骨 4880 1/2 149

4.838¹ - 1/2

地名 33¹ 朝明郡 伊勢口あり(郡、国の北東をよめたり)
近大川 = 朝明川 紀下 390¹ 住2

いうまでもなく、普通に考えるとき、

伊賀国から伊勢国へとやってきた大海人

皇子が、伊勢神宮に出来るだけ近い所、例え

は日亀山^{かめやま}にあるいは日鈴鹿川^{すずかがわ}の岸^{きし}辺^へに

たり、から、天照大神^{あまてらすかみ}を望^{もち}拝^{はい}され^た✓

というのであれば理解^{りかい}し易^{やす}い。

か、

へ遙^{はる}かに遠^{とほ}い日朝明郡^{あさけのこほり}に伊勢国北端部^{ほくたんぶ}に

あた郡。明治二十九年^{めいしにじゅうきゅうねん}廢^{はい}して三重郡^{みえ}に合^あせら

れたの迹^{あと}太川^{たがわ}朝明川^{あさけがわ}の辺^へまで行^いつて

思^{おも}ひ出^だしたよう^{よう}に天照大神^{あまてらすかみ}を望^{もち}拝^{はい}され^た✓

というのでは、不審^{ふしん}極^{きく}まりない下

か、

朝明郡^{あさけ}の海岸^{かいがん}からではなく、朝明郡^{あさけ}の迹^{あと}と

大川^{おほがわ}上^{うへ}において、天照大神^{あまてらすかみ}を礼^{れい}拝^{はい}され^た✓

というの^{うなづ}は領^{うなづ}けない。

日本書紀^{よめい}等の執筆^{しつひつ}者^{しや}達は、

大倭国^{おほやまとのくに}(肥後国^{ひごのくに})の都^{みやこ}から見て日東北^{ひのきたけ}に

の方角^{ほうかく}にある宇佐国^{うさのくに}の川上^{かわかみ}で、天照大神^{あまてらすかみ}の宮^{みや}

を望^{もち}拝^{はい}され^た✓

4,838P-2/2

奇形 4843 異様 153 異様 153

と、有るかままを記すわけにいかず、
 やむなく、少々異様なことを承知のうえで、
 倭国（大和国）の都から見て東北の
 方角にある北伊勢の朝明郡の川の辺（川上）
 で、天照大神の宮を望拝された。✓
 と置き換え、記述したものと認めれる。

*

天
改行

聖^タ 紀下406^キ 44^キ

390^キ 4,839^キ

天
改行

不破^タ 紀下393^キ 18

不破宮 紀下406^キ 5^キ 12

480^キ 396^キ 1^キ 12

和^タ 紀下393^キ 3^キ 19

こと

はかり南へ遠まわりて参拜して戦勝の御報告
天照大神の宮に参拜して戦勝の御報告
たえ、後刻改めて、伊勢国の天照大神に
丁重な戦勝の御礼をするつもりであつたとして
も、とりあえず、帰還の途中、あつたとして
日本書紀によれば、この壬申乱が終結した
時、大海人皇子は、不破宮から歸余に
着かれた
つぎ、伊勢国の桑名や、鈴鹿を経て、倭京に
というのであるか、どうしたわけか、
という記載が無い
南伊勢の天照大神の宮に詣でられた
たえ、後刻改めて、伊勢国の天照大神に
丁重な戦勝の御礼をするつもりであつたとして
も、とりあえず、帰還の途中、あつたとして
はかり南へ遠まわりて参拜して戦勝の御報告
天照大神の宮に参拜して戦勝の御報告

*

184
全

こと

関門海峡 元 508' 1'47" 2' 足 958' 足下 400' 大友 陸 自 搭 小 船
④ 4966'

4,840 P-1/2
内宮 } ⑤ 3396'
外宮 }

万-111 本 人 書
万-111 377

を行ない、そして又、伊勢神宮から吹きわたつた神風（万巻二一九九）の靈威な助力に對して深い感謝の気持ち述べるべきであらうと思われぬ。

大海人皇子は、日本書紀に記されてゐるほどには、天照大神を尊敬しておられなかつたのであらうか。

いや、そうではあるまい。

大海人皇子は、実は、宇佐国大元山山上の「内宮」に鎮座してゐる天照大神の戦後すぐ参上しておられの言葉を述べられたを望拝して戦勝を祈願されたのであらう。

と考える時、壬申乱終結直後、大海人皇子が南伊勢の「外宮」（離宮）に参拝されなかつたといふのも、納得できるといふように思われぬ。

追つて述べるには、

へ九州地方、及び近畿地方の戦いは、ほぼ同時期の七月二十三と四日に終つた。

ようである。

関門海峡から元きた道を引き返し、大元山山頂の天照大

令和元(2019)10.10(株)~10.12(4回)
令和2(2020)6.14(日)~6.15(4回)

4.840^P-3/2

④4972^P-1/2 ④4968~4970^P

1/15 17/15
6/14

神の『内宮』に詣でた大御人皇子は、戦勝の御
報告をし、幣を奉らされた。とであらう。
そして後、大御人皇子は『東海』(瀬戸
内海)を東へと漕ぎ渡ってゆかれ、約一ヶ月後の
八月末頃に『天智上皇』をはじめとする多くの
の者達が捕われの身となっていた。近江国へ
到着されたように推察される。
したがって、
大御人皇子は、不破宮から倭京へ帰還す
る時、――南伊勢の『外宮』(離宮)へは
立ち寄り兼ねたのであろう。
と想定される。(追って詳述)

*

4,841^P

十神命上、29'

おほつのみこ
まうきた
大串皇子、
矢多来子

コクヨ ケー20 20×20

(2)

せき利 云 関守 1240⁷
やまき 66¹

大分郡に基 587¹

五百甲 下 388⁸ 米 2⁵ 斤
下 388⁸ 米 2⁵ 斤
④ 4830⁸ 4,842⁸

「と37」 ④ 4827⁸
④ 4864⁸

④ 4834⁸

このとき、^{12.8m}阿蘇外輪山^{つえたてがわはうろいさ}の関^{せき}へ使^{つか}いた
 路直益人が戻^{もど}ってきて、
 関におられたのは、山部王や石川王なん
 そという者^{もの}で^はなく、^{おほつのみこ}大津皇子で
 ございました。大分君恵尺^{おほきだのきみえさか}ら九名^{めい}が^きつき従^{したが}っ
 ております。
 と報告^{ほうこう}した。
 大津皇子^{おほつのみこ}ら^{みちのあたりますひと}か、路直益人に^{つづ}続^{つづ}いて
 すぐ到着^{とうちゃく}した。大海人皇子^{おほいあまのみこ}は、大いに喜^{よろこ}んで
 お迎え^{むか}えになった。
 と^{みちのあたりますひと}ころで、阿蘇外輪山^{あそぐわんざん}の関^{せき}を塞^{ふさ}いでいた
 五百軍^{いほのいくさ}しか^{とよのくに}も^{おほきだ}豊^{とよ}国^{くに}の国司^{くにのみにものかみ}守^もらで
 あつたなら、^{おほきだのきみえさか}豊後国^{ぶんごくに}の大分郡^{おほきだのきみえさか}に基^{もと}
 盤^{ばん}をもつ豪族^{こうぞく}大分君恵尺^{おほきだのきみえさか}は、躊躇^{ちゅうちよ}せず^{は5.0m}たとえ変装^{へんさう}して
 いたとしても^{おほきだのきみえさか}身分^{みぶん}を明^あかしただ^{おほつのみ}あろうし、関守^{かんしゅ}たちの方^{ほう}
 も誤^{あやま}たず認^{みと}め得^えた^{おほきだのきみえさか}と^{おほつのみ}で^{おほつのみ}だ^{おほつのみ}らう^{おほつのみ}から、大津皇^{おほつのみ}
 子^{おほきだのきみえさか}や大分君恵尺^{おほきだのきみえさか}らは関^{せき}に留^{とど}め置^おかれ^{おほつのみ}ることな
 く大海人皇子^{おほいあまのみこ}を追^おった答^{こた}であ^{おほつのみ}らう^{おほつのみ}だと思^{おも}われ

④ 4834⁸
1/2
12⁸

要推④4838⑤4830左頁3行
-2/2

かた 弘
名を騙る 425P

4,843P

千段石法

る。
・しかし、阿蘇外輪山^{アソトウリンサン}の^{せき}巖^{いわ}を固めていたの
は、日^{とよのくに}豊^{とよ}国^{くに}の兵等^{へいとう}でなく、日^{いとのくに}伊都^{いと}国^{くに}や日^み彌^み奴^ぬ
と^とか、奇^き妙^{みょう}なことに、日^{いとのくに}伊都^{いと}国^{くに}や日^み彌^み奴^ぬ
国^{くに}（山口県）の者等^{ものら}であつた。
・ここに、大津皇子^{おほつのみこ}と大分君^{おほふのきみ}恵尺^{えさか}は、
近江^{おうみ}（大宰府）の兵達^{へいたち}によつて、^{せき}巖^{いわ}が巖^{いわ}
重^{じゆう}に守られてゐるのであろうか。近江^{おうみ}（大宰府）^{かた}方^{かた}であ
と思ひ、用心^{ようじん}深く、近江^{おうみ}（大宰府）^{かた}方^{かた}であ
つて、^{かた}巖^{いわ}を広く知られてゐない山部王^{やまべのおほきみ}・石川王^{いしかはのおほきみ}
の名^なを^{かた}騙^{かた}つたのであろう。
・^あ案^{あん}の^い定^{じよう}、^{せき}巖^{いわ}を^さ守^もつてゐた者^{もの}達^{たち}は、山部王^{やまべのおほきみ}・
石川王^{いしかはのおほきみ}を知らなかつた。そしてさらに、大津^{おほつ}
皇子^{みこ}や大分君^{おほふのきみ}恵尺^{えさか}らの^{かた}顔^{かた}も知らなかつた。
・^な今^{いま}こ^こで^{せき}巖^{いわ}を^さ守^もる^る兵^{へい}達^{たち}は、山部王^{やまべのおほきみ}・石川王^{いしかはのおほきみ}と
^{かた}名^なの^{おほ}る^{あま}者^{もの}達^{たち}を^{せき}巖^{いわ}に^{とど}留^{とど}め^お置^おき、
^{かた}方^{かた}を^{おほ}大^{あま}海^み人^み皇子^{みこ}にお^お伺^{かたが}いしたのであろうと思
われる。

大分君^{おほふのきみ}恵尺^{えさか}らであることを見^み抜^ぬか^かれてい

いみき 紀下 470 497
 紀下 94 注 13 後漢 55 年 冬
 171 注 16 紀下 365 27 4,844

前 37 ~ 94
 元

全頁 トル

トル

ま ったとキ、——大津皇子は、どうお思い
 になら小ただろうか。
 大海人皇子の子であることが分ってしまっ
 たからには、
 へもはや、これまでか
 と、覚悟をお決めになつたかも知れなり。
 ほどなや、路直益人は、躊躇うことなく大津皇
 子らを自由の身とし、自らは先駆けてこの
 朗報を大海人皇子に伝えたのであらう、と推
 察される。

ト
 な お、路直益人について、こう解説さ
 れてゐる。
 「他に見えぬ。路直は、倭漢氏が多くの子
 に分かれた中の一で、山本直を祖とし、のち
 路直寸。路宿禰となる」
 という。(「日本書紀」下日本古史及学大系
 岩波書店、三八九頁、注四四参照)

＊

H30(2018)11.14(木)～11.15(土)

H9.5.1
IF H元3/4011⑤
→

4,845^P

こと 不破 ④4807^P

紙 F386^P

④4847^P

④4811^Pではいた

参考までと
④4860
197

参考までに述べると、大海人皇子は、

六月二十四日

「恵尺は馳せて近江に往き、高市皇子

大津皇子を喚して、伊勢に逢へし。

と仰せられたのだ。

察するところ、この時大海人皇子は、

高市皇子・大津皇子が、近江(大宰府)

から真直ぐ東北方の不破(長豊海峡)、ある

いは東方の宇佐へ直行することを、禁止され

たのであろう。

と推測される。

近江(大宰府)と倭京(大和の都)とを関

門海峡あたりで分断しようとしていたとき、

二人がその方向へ駆け向かってきたのでは、

「まかりまちかえれば、追いつかる敵

敵兵達を招き寄せて、計略が滅茶苦茶になりかね

ないからである。

二人が、目立たないよう、別々に、そつと

南へ下ってきて、人知れぬ豊国へ入ることこ

そ最良の策、と思慮されたように解される。

小林 10/16P
髪を容れず

4.846P 紀下390P 紀下386P
ふさ 塞ぐ 1934 自ら 紀下390P 紀下386P
4806P 左頁

紀下390P

東海の軍 東山の軍を発す

大元山の麓の川の辺を後にした大海人皇子

郡家(宇佐の郡家か)に着こうとして

六月二十二日に美濃

国(彌奴国)山口県美禰一帯の地へ先行し

夫村国連男依が自ら早馬に乗って駆けつけ

てきた。クーデターを報告した。すてにお聞きの通り

彌奴国(山口県)の軍勢三千人を発して

正式に御報告した。

不破の道(長豊海峡)を塞ぐことが出来た

大海人皇子は、雄依(男依)の功績をお

美めになった。

郡家に着かした大海人皇子は、先ず高市皇

子に命じ、

不破に赴き、軍事を監督せよ

更に大海人皇子は、不破の道(長豊海峡)

を手中に収めたこの時、髪を容れず、東

方の倭国(近畿地方)へと兵を遣わした。

すなわち、山背郡小田・安斗連阿加布を遣

4836 1647 安斗知

「中津」の地名 29
仲月 40 636
4850

紀下386 * 6月27日は 4869 2行にある
4847

紀下403
参考資料
4845 1行
4860 1行
（こ）

山陽 紀下318
山陰 4869

わいて 東海（瀬戸内海）の軍を起し、ま
大稚穂部臣五百瀬・土師連馬手を遣わして東
山（山陽道・山陰道のうち山陽道を指す）ので
あろう）の軍を起されたのだった。
因みに述べる、これら軍勢は、九
州から見た時には、東方へ向かった軍、つ
まり東の師、ということになる。（天武紀元年
七月四日条の東の師参照）
後述

この日（六月二十六日）の夜。大海人皇子
は、桑名郡家に宿をとり、そこに停って進ま
なかつた。
六月二十四日に吉野を出て以後の連日連夜
の強行軍に、さすがの大海人皇子も疲れきつ
てしまわれたのであろう。
あるいは、この桑名郡家は、豊国の中津
あたりに相当すると考えられたのであろうか。

45.10.23(土)⑥

皇太子妃 紀下410? 4.848
紀下368天智の娘

(2)

加担 426
天智

地名 621P 405 636P
日本 416P ねに 357P

*

中津駅の南四時には、桑野という地名がある。
・なお、中津も桑名も、中臣氏の所領だったの
のかも知れない。豊国の中津に中臣村(豊後
に中臣神社)があり、桑名神社がある。
加担し、天智上皇側と敵対した、とは考えに
くいものの、大海人皇子の軍を阻止する
ことなど、出来なかったのであろう。
なお、
へ大海人皇子の妃菟野皇女は、天智上皇の
娘なのだから、豊国の中臣氏に手厚いもてな
しを受けられた
と思われ。
そして、予め述べると、
へ妃菟野皇女は、壬申乱が終結し、
大海人皇子が迎えに来られる迄、中津を動か
れなかった
ように想到される。(後述)